HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	スコットランドと「運命の石」 : 中世における王国の統合と神話の役割(続)
著者	常見，信代
引用	北海学園大学人文論集，21：147-180
発行日	2002-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

スコットランドと「運命の石」
── 中世における王国の統合と神話の役割（続）──

常　見　信　代

はじめに

本稿は,「スコットランドと‘運命の石’―中世における王国の統合と神話の役割」(『人文論集第19号』, 2001年7月）の続編である。前稿では，スコットランド王国の統合過程および1296年の独立戦争に至るまでの対イングランド関係について検討した。このような検討の上に，本稿では,「運命の石」に関する史料を検討してスコットランド王の即位儀礼およびスコットの「出自神話」(origin myth) を取り上げ，その特徴を探る。こうした検討をとおして，王国統合の過程で創出された「スコットランド人」なるものがどのように自己を認識していたか，独立戦争がこの自己認識にどのような変化をもたらしたかを検証しようとするものである。

1　スコットランド王の即位儀礼

1）スクーンと「信仰の丘」

「運命の石」は1296年までスクーン修道院に保管され，スコットランド王の即位式に用いられていた。しかし，いつごろから即位に使われたのか，正確には不明である。1996年にスコットランドに返還されてから,「運命の石」についての科学的調査がおこなわれ,「石」は重さが152キロで，石質はスクーン周辺でよく産出される赤色砂岩であることが明らかになった[1)]。したがって，スコットがアイルランドやアーガイルから運んだというより，むしろ9世紀中葉にスコットが東部に進出して後に，スクーン周辺で手に入れたと推測される。あるいは，ピクト王国で即位儀礼や宗教儀礼

に用いられていたのをスコットが継承した可能性も否定できない。

スクーンはピクトの時代から王権の拠点の一つであったとされる[2)]。後述するように，1249年にアレグザンダー3世の即位式がおこなわれたのはスクーン修道院境内の'Moot Hill'であるが，『アルスタ年代記』の728年の項にこの地名があり，そこでピクトの王族のあいだで王位をめぐって戦いが起きたことが記されている[3)]。また，『スコットランド年代記』の中に次の記述があり，ピクト王国が征服されて後も，スクーンのこうした地位はスコットに受け継がれているのがわかる[4)]。

「コンスタンティン王(2世)の治世6年(906年)にスクーンの'civitas regalis'の近くにある丘の上で，王と司教ケラッフ（Cellachus episcopus）とが会談して信仰の法と教会の権利をスコット（Scoti）の慣習に従わせることを誓約した。それ以来，この丘は信仰の丘（Collis Credulitatis）とよばれている」。

ここで注目されるのは，'civitas regalis'である。なぜなら，'civitas'は一般には'town', 'city'をさすが，アイルランドの史料には'civitas regalis'が特に王の即位式がおこなわれる土地を意味する例があり，そこの教会・修道院をさす場合もあるからである[5)]。『スコットランド年代記』でも，ケネス2世（在位971－995）が創建したブレヒン（Brechin）の修道院が'magna civitas'とよばれている[6)]。したがって，906年に会談がおこなわれたスクーンの'civitas regalis'とは，「王の修道院」の意味で，即位式がおこなわれるところと解釈することができる。スクーンでは，1120年頃にアレグザンダー1世によりダラム近くのノステル（Nostell）からアウグスティヌス会の修道士が招かれて修道院が創建されたことが知られているが，そのかなり前からそこに修道院が存在し，王権と密接な関係を保っていたと推定される。また，11世紀に書かれた『予言の書』の中で，スクーンは，「盾のいとも高貴な音が鳴り響くところ」と表現されている[7)]。これは新しい王を祝して列席者が盾を打ち鳴らす様子を表したと解釈される。

このように，スクーンはピクト王国消滅後にもスコットの王権と密接な関係をもっているが，そこで執りおこなわれた即位儀礼については，アレグザンダー3世の即位式を除いて，きわめて断片的なことしかわかっていない。たとえば，北部イングランドにあるリーヴォウ修道院の院長エイルレド（Ailred of Rievaulx）がデイヴィッド1世の死（1153年）を悼んで寄せた弔辞にある次の一節である[8]。

「敬虔なデイヴィッド王がこの世を去られた。信仰篤き王であったから，その御霊はやすらかであろうと確信するが，それでもなお，われわれは王の逝去を深く悲しまざるをえない。…われわれは，王がみずからは王位を求めず，むしろそれを嫌っていたことを知っている。われわれは，デイヴィッドが王位を継承したのはやむをえない外部的な事情からであり，けっして支配欲にかられて貪欲に王位をねらったのではないことを知っている。そして，あたらしく王位につくにあたって，*スコットランドの人びとが彼らの父祖の流儀に従って用意したあの神聖なる儀式*をデイヴィッドが嫌悪し，司教らに促されてもそれを受け入れることはできなかったのを知っている。…」(イタリックは筆者)。

文中のイタリックの部分がデイヴィッド1世の即位式（1124年）に言及していることは明らかであるが，この父祖伝来（more patrio）の「神聖なる儀式」(obsequia)が具体的にどのようなものかは説明されていない。エイルレドは若い頃，デイヴィッド1世の側近くに仕えた経験があり，その後もデイヴィッド1世の治績について詳しく記した著作を多く残しているから，この記述を根拠のない創作と断定することはできない[9]。推測すれば，「運命の石」の上に着座して王位につく儀式をさしているのかもしれない。スコットランド生まれとはいえ，デイヴィッドは王位を継承するまでのほぼ四半世紀の間，イングランド王の宮廷に滞在していたから，スコットランドの伝統的な儀式は野蛮で耐えがたいものに思われたのかもしれない。

あるいは，ジェラルド・オブ・ウェールズ（Gerald of Wales）が『アイルランド地誌』の中で紹介しているような「異常で忌まわしい」儀式であろうか。ジェラルドによれば，アルスタ地方の最北端にあるケネルクニル(Kenelcunill, Co.Donegal)では，土地の人すべてが見守る中で，王となる者が白い雌馬と交わるという。さらに，そのすぐ後に馬を屠殺して煮込むと，今度はその煮汁で風呂が用意され，参集した人びとが取り囲む中で王となる者がこの風呂に入りながら人びとともに馬の肉を食べ，その煮汁をがぶ飲みする。このような「邪悪な儀式」を終えてはじめて，彼は王と認められ支配権を授けられるという[10]。ジェラルドのこの記述は，デイヴィッド1世が忌み嫌った「儀式」の内容を推測する際に，参考として引用されることが多い。しかし，この著作についてはいくつかの限定が必要である。

ジェラルドは，アイルランド太守となったジョン（のちのイングランド王)に随行して1185年にアイルランドに渡り，翌年まで滞在した経験をもつ。『アイルランド地誌』は，そのような経験にもとづいて1188年までに完成されたのであるが，当時，アングロ＝ノルマン勢力はまだアルスタ地方の北部にまで進出していないから，ここに紹介した儀式をジェラルドが実際に目撃したわけではない。したがって，ジェラルドは人づてに，あるいは書物などを通してこの話を知ったことになるが，既にすたれてしまった儀式をあたかも現在でも行われているように紹介した可能性がある。少なくとも，ジェラルドが直接見聞したであろうレンスタ地方では，このような「邪悪な」即位式は12世紀には知られていない[11]。また，ジェラルドは彼の一族とともにアイルランド征服に深くかかわり，その成否に強い利害をもっていた。そのため，彼の著作には，ヘンリ2世によるアイルランド征服の大義を正当化する意図がうかがえ，教会改革の必要性を訴えるためにアイルランドの野蛮で異教的な風習や慣行をことさら強調する傾向がある[12]。

しかし，ジェラルドの伝える話がまったくの作り話というのではない。そのような儀式が12世紀になってもおこなわれていたかどうかは疑問で

あるが，少なくとも動物の犠牲を伴う即位儀礼は，遠い過去においてアイルランドに限らず各地で知られている[13]。このような儀式は原初的な豊饒儀礼の名残であり，動物は地母神を象徴し，即位式は，王となる者と彼の支配する土地と住民との，そしてその地母神との結婚を意味していた。また，地母神の化身である動物の肉や肉汁を王と人びととがともに食することにより，王の在位中の土地と住民の豊饒・繁栄が約束されると信じられていた[14]。石もまた大地とその地母神を象徴し，石の上での即位も同様に豊饒儀礼の名残の一つであった。しかし，「運命の石」に関する言及は，1249年の即位式までは，どこにも記されていない。

デイヴィッド1世が即位式において嫌悪した「神聖なる儀式」がジェラルドの紹介するような動物の犠牲を伴うものであったのかどうかを判断することはできない。しかし，たとえ原初的な儀式を伴ったとしても，即位式がおこなわれたのはスクーンの修道院であり，エイルレドの記述にあるように，司教ら聖職者が立ち会っている。この点で，ジェラルドの紹介する例とは異なっている。

2）1249年の即位儀礼

1249年7月13日にスクーンで即位式がおこなわれ，アレグザンダー2世の長子アレグザンダーが8歳で王位を継承し，スコットランド王アレグザンダー3世を名乗った。父のアレグザンダー2世は，西部島嶼地帯を軍事遠征中にアーガイルのケレラ島(Kerrera)で病死し，7月8日にその埋葬式がメルローズ修道院（Melrose）でおこなわれたばかりであった。

アレグザンダー3世の即位式については3点の史料があり，ここではじめてスコットランドにおける即位儀礼の具体的様子を知ることができる。その一つは，フォーダン（J. Fordun）の『スコットランド人の年代記』に収録された *Gesta Annalia*（『年譜』）の記述である[15]。この『年代記』自体は1370年代に書かれたものであるが，1249年の即位式に関する *Gesta Annalia* の記述は，アレグザンダー3世時代の同時代史料に基づいたもので，おそらく即位式の列席者か，その関係者の記録をもとにしたものと評

価されている[16]。第二の史料は，スクーン修道院に残された印璽(seal)で，そこに即位式の場面が刻印されている(図1参照)。これ自体には年代がなく，誰の即位式か特定できないが，印璽の様式が13世紀のものであること，印璽の図像と *Gesta Annalia* の記述とが一致することから，1249年の即位式の直後に刻印されたと一般にはみなされている[17]。これら2点の同時代史料に加えて，15世紀前半に書かれたバウァ（W. Bower）の『スコットランド人の年代記』にも，1249年の即位式についての解説があり，また，その写本に即位式の挿絵（図2）が残されている[18]。これら3点の史料によって，アレグザンダー3世の即位式の具体的な模様を知ることができる。そこで，*Gesta Annalia* の記述から紹介したい。

Gesta Annalia の47章において，即位式の列席者について説明され，バロンや騎士ら大勢とともに，セント＝アンドルーズの司教とダンケルドの司教，スクーンの修道院長も列席したことがわかる。ところが，そこに参集した貴族のひとりで王国司法長官（Justiciar）のアラン＝ダワード（Alan Durward）が即位に先立ってアレグザンダーはまず騎士に叙せられるべきであると主張し，貴族の間で論争になったという。しかし，メンティス伯のウォルタ＝カミン（Walter Comyn）が騎士叙勲を受けないで即位した例をあげ，一刻も早く即位すべきことを主張し，結局，カミンの主張どおりに即位式がおこなわれたという。ちなみに，13世紀のヨーロッパでは即位前に騎士に叙されるのが慣例となりつつあり，イングランドのヘンリ3世も9歳で即位したが，その前に摂政(rector)によって騎士に叙されている。アレグザンダーについては摂政が決められていないから，アラン＝ダワードの主張には摂政職をねらう意図があったとも受けとれる[19]。

つづく48章には，「スクーンでのアレグザンダー3世の戴冠について」(De coronatione regis Alexandri tertii apud Sconam）という題がつけられ，即位式の模様が次のように説明されている。

「…ただちに即位式をおこなうべくファイフ伯マルコムとストラス

図１　スクーン修道院の「印璽」

図２　バウァ『年代記』の「挿絵」

アーン伯マリーズがアレグザンダーを教会の東はずれの墓地に立っている十字架の前に導いた。そこには，絹布でおおわれた玉座が置かれてあり，その布には金糸の刺繍が施されていた。ファイフの伯とストラスアーン伯がアレグザンダーを玉座に（in regali cathedra）座らせると，セン

ト＝アンドルーズの司教が他の列席者の手をかりてアレグザンダーを聖別した(consecrarunt)。王が玉座すなわち石の上に(super cathedram regalem, scilicet, lapidem）着座している間，他の伯や貴族らは跪いて王の足元を自分たちの衣服でおおった。

この石は，アルバ（スコットランドを意味するゲール語）の王の即位のためにこの修道院に大切に保管されているものである。いかなる王も，まず最初にスクーンにあるこの石の上に着座して王とよばれなければ，スコットランドを統治することはけっしてできない[20]。スクーンは，古くからアルバの諸王の首都をなしていたのである。

そして見よ(Et ecce)。すべてが終わったとき，ひとりのハイランド＝スコット（Scotus montanus）が玉座の前に出て跪き，頭をたれて彼の母語（ゲール語）で，「たたえよ，アレグザンダーはアルバの王なり，アレグザンダーはアレグザンダーの息子なり，(後者の)アレグザンダーはウィリアムの息子なり，ウィリアムはヘンリの息子なり，ヘンリはデイヴィッドの息子なり」[21]といって王をたたえ，スコットの言葉で（hiis Scoticis verbis）王の系図を最後まで朗唱したのである。

これをラテン語に直せば次のようになる：'Salve rex Albanorum Alexander, filii Alexandri, filii Willelmi, filii Henrici, filii David, filii Malcolmi, filii Duncani, ……（中略－以下，ケネス1世までのスコットランド王，ついでダルリアダ王へと遡り，アレグザンダー3世から数えて57代目のFergusについて）Fergusはアルバにおけるスコットの最初の王なり（primi Scotorum regis in Albania)'。…それから上記のハイランド＝スコットは，その系図をさらに一人ひとり遡って，ついに最初のスコット，すなわちIber Scotにたどりついた。このIberはGaithel GlasとScotaの間に生まれ，父のGaithelはかつてのアテネの王Neoilusの息子であり，母のScotaはエジプト王Pharaoh Chenthresの娘である」(文中の段落および（　）内の日本語は筆者)。

以上が*Gesta Annalia* 48章の全訳である。先にも述べたように，この記

述は，スコットランドにおける即位式の具体的模様を記した史料として現存する最初のものであり，また「運命の石」に言及した最初の記述でもある。さらに，この文末には次節で検討する出自神話についての言及もあり，ここであえて全文を紹介した。次に，この記述と，スクーン修道院の印璽の図像（以下，「印璽」と略記）およびにバウァの『年代記』の挿絵（以下，「挿絵」と略記）を比較検討しながら，1249年における即位儀礼の具体的内容を検証したい。

i 「玉座すなわち石」

はじめに，アレグザンダー3世が着座したという「玉座すなわち石」であるが，「印璽」にも「挿絵」にもそれは描かれていない。おそらく，エドワード1世がウェストミンスタで作らせた「戴冠式の玉座」のように，アレグザンダー3世が座った椅子の下に収納されているためと推定される[22]。なお，*Gesta Annalia* では，単に「石」あるいは「玉座」とよばれているだけで，「運命の石」という名称は用いられていない。これについては，次節で検討する。*Gesta Annalia* では，この「石」はスクーンの修道院に保管され，即位式の際に教会境内の十字架の前に置かれたというが，「印璽」には十字架が描かれていない。代わって背景全体が点刻され，野外であることが示されている。一方，「挿絵」には塚のような小高いところに十字架が立っている。ここが906年にコンスタンティン2世と司教ケラッフが会談した「信仰の丘」であり，後に 'Moot Hill' とよばれた丘である。

ii 「ファイフの伯とストラスアーン伯」

次に即位式に列席した世俗貴族についてであるが，ウォルタ = カミンとアラン = ダワードが参列していたことは既に紹介した。この2人はいずれもアングロ = ノルマンの家系で，当時の王国の最有力者であった。しかし，2人とも，野外での即位式ではおおきな役割を果たしていない。アレグザンダー3世を十字架の前に案内して「石」に着座させたのはファイフとストラスアーンの伯で，2人はともに12世紀以前の「モルマー」(mormaer)

に遡る家系に属し，王権が推進した「ノルマン = コンクェスト」後も在地貴族としての地位を保持していた。特にファイフ伯は，王権と密接な関係を保ちつづけ，スコットランド貴族の筆頭に位置していた[23]。「印璽」では，2人は下の段の左右の端に小さく描かれ，その下にそれぞれの紋章が刻印されている。王の右手側にいるのがファイフの伯で，「挿絵」には大きな剣をかかげた姿で描かれている。*Gesta Annalia* では言及されていないが，この剣は，人びとを守る王の務めを象徴し，即位式の最後にファイフ伯から王に渡されたという[24]。王の左手側にいるのがストラスアーン伯で，スクーンがストラスアーン伯領に隣接していることから，即位式場を守護する任を負っていたと推測される。いずれにせよ，即位式における2人の伯の役割について，*Gesta Annalia* の記述と「印璽」および「挿絵」との間におおきな相違はない。

iii 「アレグザンダー3世の戴冠」と3人の聖職者

聖職者については，*Gesta Annalia* に3人の司教・修道院長の名前があげられ，「印璽」にも王の左右と左上に3人の聖職者がそれぞれ描かれている。この3人のうち，「印璽」で王の右手側に描かれているのは，頭上の司教冠（ミトラ）からセント = アンドルーズの司教と特定される。また，この司教の上で箱のようなものを捧げているのはダンケルドの司教で，この箱は，アイルランド系教会に特有の家の形をしているところから，コロンバの聖遺物箱と推定される。コロンバの聖遺物はアイオナ（Iona）に保管されていたが，849年にケネス1世がそれをダンケルドに移したといわれる[25]。*Gesta Annalia* には説明がないが，「印璽」から，その聖遺物が野外での即位式に用いられたことは明らかである。アイルランドでは，土地にゆかりの聖人の聖遺物を収めた箱が王の即位宣誓に用いられ，その後，人びとの間を行進する例が知られている。おそらく，1249年の即位式でも，これに手をおいて王の宣誓がおこなわれたと推測される[26]。しかし，スコットランドでは，前稿で紹介したように，既に12世紀に王権のもとで聖アンドルーの守護聖人化が推進され，その遺骨を収めるセント = アンドルーズ

教会がダンケルドに代わって王国の首位教会の座を占めていた[27]。それでも，コロンバの聖遺物がダンケルドから運ばれてアレグザンダー3世の即位式においてその役割を果たしていたことになる。1249年の即位式においては，先に紹介した2人の伯といい，この聖遺物といい，「ノルマン＝コンクェスト」以前の制度や慣行がなお尊重されていることに注目したい。

3人の聖職者のうち，2人がこのように特定されると，残るひとり，「印璽」で王の左手にいる聖職者は，スクーン修道院長ということになり，即位式に列席した聖職者について *Gesta Annalia* の記述と「印璽」は一致する。ところが，「挿絵」には，聖職者がひとりも描かれていないのである。ただし，その理由をバウァ自身が『年代記』の本文で明快に説明している。それは，教会の中でセント＝アンドルーズの司教により「戴冠の儀式が厳かに執りおこなれ，その後に，古来の慣例に従って」，野外の十字架の前で「石」の上に着座する儀式がおこなわれたからであるという[28]。つまり，バウァの記述には，「石」に着座する前にアレグザンダーは戴冠して既に王となっているのであり，聖職者が立ち会わない野外での儀式は付け足しに過ぎないという意味が込められている。

バウァが，アレグザンダー3世は聖職者によって正式に塗油と戴冠の儀式を受けて王になった，という意味でこれを書いているなら，それは事実に反している。確かに，*Gesta Annalia* 48章の題は「アレグザンダー3世の戴冠について」とあり，「印璽」でも，1260年に刻印された国璽（great seal）でも，アレグザンダー3世の頭上には王冠があるから，バウァのいうように，正式に戴冠式をあげたかのようである。しかし，実際には，スコットランド王が塗油と戴冠の儀式を受けることは1329年まで正式には認められていないのである。当時の西欧キリスト教世界において，即位儀礼の核心は戴冠と塗油の儀式にあり，こうした教会の儀式を経てはじめて真の国王が創られるとみなされていた。このためスコットランドでも，たとえばアレグザンダー2世も，即位後にアレグザンダー3世自身も，教皇に塗油と戴冠の許可を求めているが，スコットランド王は自分の家臣であるというイングランド王の主張から，教皇の承認は与えられていない[29]。その許

可がおりたのは1329年で,スコットランドの独立が正式に承認されて1年後のことであった。

このように，バウァの記述は事実に反しているが，これは単なる事実誤認というより，むしろ独立の王国の君主にふさわしいようにその歴史を美化したと解釈される。*Gesta Annalia* 48章の「戴冠」の題も同様で，1370年代にフォーダンの『年代記』に収録されたときに付け加えられたとも推測される。しかし，「印璽」やアレグザンダー3世の国璽にある王冠は，もちろん後から付け加えられたものではない。ちなみに，国璽に王冠が描かれたのはアレグザンダー3世が最初で，これ以後ロバート1世（在位1306－1329）まで，スコットランド王は，戴冠を教皇から認められていないにもかかわらず，国璽では頭上に王冠を戴いた姿で描かれている。しかし，これは野外での儀式に先立って教会の中で戴冠式がおこなわれたことを意味しない。「印璽」や国璽に王冠を描くことで，たとえ正式に戴冠を認められていなくとも，スコットランド王はイングランドなど他国の君主と同等であることを示したのである[30)]。

したがって，*Gesta Annalia* の記述と「印璽」が1249年当時の状況を反映していることになり，野外での儀式が即位式のすべてであったと判断できる。そこで，再びこの2つの史料で聖職者の役割を検討すれば，王の右手にいるセント＝アンドルーズの司教が「他の列席者」，特に王の左手側にいるスクーン修道院長の「手をかりて」，王のローブに手を添え，「アレグザンダーを聖別した」ことになる。つまり，*Gesta Annalia* にある「聖別した」とは，塗油の儀式などではなく，ローブに手を添えてアレグザンダーを祝福したという意味にとれる。このように解釈すれば，1249年の即位式において聖職者はきわめて補足的な役割しか果たしていないことになる。

この点について，メルローズ修道院の『年代記』の記述は示唆的である。その1249年の項に,「7月13日にアレグザンダーが,父祖の流儀に従って,諸侯によって玉座に座らされて国王にされ，すべての者に正統なる相続人として迎えられた」と書かれ，即位式の世俗的性格が強調されているから

である[31]。この作者は,「石」に着座する行為がアレグザンダーを王にしたと解釈し,着座させた諸侯をキング = メイカーとみなしているのである。

iv 「ハイランド = スコット」

ハイランド = スコットとは,*Gesta Annalia* の 'Scotus montanus' (山地地方のスコット) の意訳である。「山地地方」とは,地理的にはスコットランド西部や北西部をさし,そこは近世以降「ハイランド」とよばれるようになるが,そこには単なる地理的意味だけでなく,「ゲール語を話す地方」という意味も含まれている[32]。「印璽」では,向かって右上に細長い巻物を持っているのがハイランド = スコットで,巻物は彼が朗唱する系図であろう。その後ろに小さく描かれているのはハーピストである[33]。一方,「挿絵」には,ハイランド = スコットがまさにアレグザンダーをたたえ,その系図を朗唱しはじめた場面が描かれている。彼の口から出ているのは,*Gesta Annalia* にあるのと同じ文言である。このように,3点の史料は一致してハイランド = スコットがアレグザンダーの系図を朗唱したことを伝えているが,それはどのような意味を持っていたのか。

この問題について,ハイランド = スコットこそがこの即位式におけるキング = メイカーであることを論証したのがバナマン (J. Bannerman) である。バナマンは,頌歌を朗詠し系図を朗唱しただけでなく,「印璽」や「挿絵」でアレグザンダーが手にしている王笏を渡したのもハイランド = スコットであろうと推定する[34]。*Gesta Annalia* には王笏についての言及はない。2つの図像史料からも,誰がアレグザンダーにこれを渡したのかはわからない。しかし,前後の文脈から,ハイランド = スコットが頌歌を朗詠する前であることは明らかであるから,ハイランド = スコットが「玉座の前に出て跪き」,王笏を渡して,それから頌歌を朗詠し,系図を読み上げたと推定される。王笏は王権を象徴する。また,ゲールの世界において王や王家の系図は権利証書に匹敵し,王の支配権の法的根拠を証明する[35]。つまり,ハイランド = スコットは,この即位式において王笏を渡してアレグザンダーに王権を授け,その系図を朗唱してその王位継承の正統性を証明

したことになる。このように論証してバナマンは，ハイランド = スコットこそがキング = メイカーであると結論する。

さらに，バナマンは，このハイランド = スコットが果たした役割がアイルランドの即位式における‘ollamh’(king's poet) の役割と同じであることに注目し，スコットランドの即位儀礼の起源にも言及している。‘ollamh’とは，ゲールの職業的詩人 (fili) の中で最高位にある学識者で，特に，即位式において，まさに上述したハイランド = スコットの役割を果たした。その存在は12世紀以前に遡るが，‘ollamh’に直接言及した史料はアイルランドにしか現存しない。たとえば，コナハト王の即位式についての規定書が残されている。13世紀以前に，おそらくアングロ = ノルマンの到来以前に現在の形にまとめられたと推測されている[36]。それによれば，コナハト王の即位式はカーンフリ (Carnfree) にある先史時代の塚の上でおこなわれ，この地方の司教や小王(sub-king)らが列席したが，王の手に王杖を渡すことができるのはコナハト王の‘ollamh’であるÓ Maol Chonaireだけである。そもそも，塚の上にあがれるのは，王および王杖を渡すこの詩人そしてこの塚の門を守護する者だけで，貴族といえどもそれは許されなかった。このように，「‘ollamh’こそが真のキング = メイカーであった」[37]。

スコットランドについては，1249年の即位式を除いて‘ollamh’の存在そのものを示す史料は現存しないが，バナマンは，12世紀以降の勅許状(charter)の証人欄にあるゲール系の人名から，父子と思われる2名がデイヴィッド1世からマルコム4世治世にかけての「スコットランド王専属の詩人」(ollamh rí̇g Alban) であったと推定する。さらに1249年の即死式におけるハイランド = スコットは，この同じ家系に属する可能性を指摘している[38]。この指摘については，今後に実証の課題を残しているが，ハイランド = スコットがアレグザンダー3世の即位式においてアイルランドの即位儀礼における‘ollamh’と同じ役割を果たしていた点については十分に説得的である。

以上の検討から，1249年の即位式において，重要な役割を担ったのはハイランド = スコットであり，ファイフとストラスアーンの伯であったとい

うことができる。これにダンケルドの司教が抱えるコロンバの聖遺物を加えれば，いずれもスコットランドにおける「ノルマン = コンクェスト」以前に遡る制度や慣行である。しかも，その多くがアイルランドにまで遡るゲールの伝統であった。13 世紀中葉において，ゲールの伝統がスコットランド王国の伝統としてなおも丁重に守られていたのである。

v 「スコット」・アイルランド・スコットランド

アイルランドとの関連でもう一つ注目されるのは，この即位式でハイランド = スコットが読み上げた系図である。それはアレグザンダー 3 世の祖先をたどりながらスコットランド王権の系譜を示しており，この系譜が，上述のように，アレグザンダーに王位継承の正統性を与えたのである。そこで，この系図を詳しく検討すれば，ケネス 1 世からダルリアダ王へ，さらにアイルランド王およびその伝説上の諸王へと遡り，ついには Iber Scot にたどりつく。そして，この Iber がスコット (Scoti) の始祖だというのである。つまり，アレグザンダー 3 世はアイルランド王の子孫なのであり，アイルランド王を通してスコットの始祖につながるのである。

アイルランドとの結びつきを強調しているのは，アレグザンダー 3 世の系図だけではない。12－13 世紀のスコットランド王の系図については，数編の写本が現存するが，そのいずれもが，アレグザンダー 3 世の系図と同様に，スコットランド王からダルリアダ王へ，そこからアイルランドの諸王へ，さらにスコットの始祖へと遡っている[39]。アイルランド王との結びつきは，スコットランド王権に正統性を与え，その由緒ただしいことを証明したのである。また，アレグザンダー 3 世の系図を含め，これらの系図にでてくる Iber (Eber, Hiber) や Gaithel (Gaedel) Glas, Scota などスコットの始祖も，『アイルランド侵入の書』などによって既にアイルランドで広く知られていた出自神話を翻案したもので，スコットランドで独自に創作されたものではない[40]。

スコットランド王国の起源をたどれば，ダルリアダ王国に遡るから，スコットランド人はアイルランド人の子孫であるとの認識は，歴史的事実に

基づいたものである。Scotiaは，もともとアイルランドをさし，Scotiとはアイルランドの人びとを意味していた。またアイルランドとスコットランドは，その後，数世紀にわたって，同じ言語や文化・習俗，聖人崇敬などで結ばれていた。これも歴史的事実である。したがって，「アイルランド南部のマンスタ（Munster）からスコットランド北部のマリ（Moray）に至るまで，人びとはみずからをゲール（Gáedil）と認識して一つの民族（a single people）を形成していた」といっても過言ではない[41]。たとえば，アイルランドの年代記に，11世紀中葉に死亡したスコットランドの司教が「ゲールの光輝」と記され[42]，その1世紀後に死亡したスコットランド王マルコム4世もアイルランドの年代記に「東の海の彼方にいるゲールの最高のキリスト教徒」と記されている[43]。また，当時のスコットランドにおいては，ゲール語が支配言語であったから，その祖国であるアイルランドを師と仰ぎ，多くの学生や学識者がスコットランドから渡って修行を積み，その強い影響を受けていたことも事実である[44]。

しかし，問題は12世紀に入って，特にデイヴィッド1世の治世以後についてである。これ以後，スコットランド王権は積極的にアングロ＝ノルマン文化の導入策を推進した。イングランドや大陸から導入した制度や規範が王国統合の装置となり，'Scottishness' 創出の媒体となったことは前稿で説明したとおりである[45]。この結果，アレグザンダー3世の即位式がおこなわれた13世紀中葉には，ゲール語は，西部や北西部つまりハイランドを除いて，既に決定的な衰退の途にあり，代わってラテン語とフランス語が宮廷や教会・修道院の言語となっていた[46]。

言語や文化だけでなく，スコットランド人の血筋においても，アングロ＝ノルマン化が深く進行していた。たとえば，ウィリアム1世（在位1165－1214）の時代について，イングランドの年代記作者は，「最近のスコットランドの王ときたら，その血筋や言葉，その立ち居振る舞いなどからして，まるで自分をフランス人と思っているようである」と評している[47]。事実はこの作者のいうとおりで，ウィリアム1世の祖母も母もフランス貴族の家柄の出身であり，ウィリアム1世自身もフランス貴族の娘を妃に迎えてい

る。さらに，その後を継いだアレグザンダー2世も，最初の妃はイングランド王ヘンリ3世の姉妹で，その死後，再婚した相手は，すなわちアレグザンダー3世の母は，フランス貴族の出身であった。これは王家に限ったことでなく，貴族も同様で，新来のアングロ＝ノルマン系貴族はもちろん，古くから続く在地貴族も，たとえば，その筆頭であるファイフ伯家やストラスアーン伯家も，スコットランドのアングロ＝ノルマン系貴族やイングランドの貴族と姻戚関係で結ばれ，一つの貴族社会を構成していた[48]。

このように，1249年の即位式においては，即位したアレグザンダー3世も，列席した貴族らも，その言語や文化，その血筋において，すでに決定的にアングロ＝ノルマン化していたのである。それでもなお，即位式では，アイルランドに由来する即位儀礼にのっとってスコットランドのゲール起源が謳われ，アレグザンダー3世がアイルランド王の子孫であることを証明して，その王位継承の正統性が示されたのである。つまり，王国統合の過程で創出された「スコットランド人」とは，なによりもアイルランド人の子孫であるという認識が示されているのである。

2　スコティシュ＝ネイションと「出自神話」

1）ロバート1世の書簡

スコットの出自神話がスコットランドで独自に構想されるようになるのはイングランドとの戦争開始以後であり，現存史料の中でその最初の例は1301年の教皇庁において示されている。しかし，スコットランドのアイルランド起源やスコットランドとアイルランドとの一体性という認識がただちに消滅したわけではない。

ロバート1世がアイルランドに宛てて送った書簡はその例である。この書簡に日付はないが，その文面から，即位して3カ月後の1306年6月から翌年2月にかけての時期とされている。この中で，ロバート1世は，スコットランド人とアイルランド人は「同じネイションの種」から生まれ，同じ言語と慣習を共有しているのであるから，「われわれのネイション」の古来

の自由を回復するために，協力関係を強化しようと訴えている。ここには，スコットランドの起源がアイルランドにあるという系譜関係への言及はないが，ゲールとしての一体性を強調している点でスコットランドの伝統的な認識が示されている。しかし，書簡が出された時期は，ロバート1世がイングランドのみならず国内のカミン・ベイリアル派を敵に回して軍事的敗北を重ね，西部島嶼地帯を転々として軍勢の建て直しをはかっていた時期にあたり，この訴えもアイルランドからの援軍を切望してのことであった[49]。したがって，これは独立戦争期に数多く出されたプロパガンダ文書の一つであり，そうした文脈の中で読む必要がある。次に紹介する出自神話も，そうしたプロパガンダの一つであるが，この場合は，より永続的な影響を与えたという意味で注目される。

2)「ブルートゥス伝説」

1296年からの独立戦争は，教皇庁を舞台にスコットランドとイングランドの間に「歴史戦争」をも引き起こした。この戦争は，エドワード1世による武力介入に対して，スコットランド側が「王国共同体」の名前で教皇に上訴し，仲裁を求めたことに始まる。これを受けて教皇ボニファティウス8世が1299年にエドワード1世に対して勅書（*Scimus fili*）を発し，スコットランド王国はローマ教会に属しているから，エドワード1世が実力でスコットランド王国を支配することは不法である，と非難した。その上で，エドワード1世がスコットランド王国に対して権利を有すると主張するなら，教皇にその根拠を示すように求めた[50]。この結果，1301年5月にエドワード1世がスコットランド王国に対する宗主権の根拠を示す文書を教皇に送り，これにスコットランド側が反論するなど，両国の歴史的関係をめぐって激しい論争が展開された。スコットランドについての新たな出自神話がおおやけにされたのは，この論争の中である。

エドワード1世が教皇に送った文書には，ブリテンの始まりから独立戦争開始までの歴史におけるイングランドとスコットランドとの関係が詳細に論じられている[51]。既に1291年3月に，ノラムでの集会に先立ってエド

ワード1世はイングランド各地の修道院に命じてスコットランドとの関係に関する史料の調査をおこなわせていたが，教皇の勅書が発せられると，1300年9月にリンカーンに議会を召集して対応策を協議し，再び教会・修道院に調査を命じ，さらに，国王文書についても調査させている[52]。エドワード1世の文書は，このような入念な準備の上で作成されたと推定される。しかし，この文書の中で，エドワード1世がスコットランド王国に対する宗主権の根拠としたのは，究極的には「ブルートゥス伝説」の独自の解釈であった。この伝説は，ジョフリ＝オブ＝モンマス（Geoffrey of Monmouth）の『ブリタニア列王伝』第2巻に記されたブリトン人の出自神話の1部で，ブリトン人の始祖ブルートゥス（Brutus）が死亡すると，ブリタニアはその3人の息子の間で分割され，長男（Locrinus）がイングランドを，2人の弟（Albanactus，Cambrus）がそれぞれスコットランドとウェールズを相続したという話である。この話をエドワード1世は，王権(regia dignitate)は分割されずにロクリヌスが継承したと解釈し，ロクリヌスの後継者であるイングランド王はアルバナクトゥスの相続分であるスコットランドに対して宗主権をもつと主張した[53]。これがエドワード1世の宗主権の根拠であった。

3)「スコゥタ伝説」

スコットランド王国の側では，既に3人の使節を教皇庁に送っており，エドワード1世の文書が届くと，それを見た上でエドワード1世の主張の一つ一つに対して根拠を示して反論を展開した[54]。この反論については，2編の文書（Instructiones, Processus）が残されている。いずれも教皇庁に提出された文書そのものではなく，その下書きとされているものである[55]。また，教皇庁にいるイングランド側の使節がスコットランド側の反論を要約して本国に報告した書簡も残されており，これによってもスコットランド側の反論の内容をうかがうことができる[56]。

スコットランド側の反論は，次の2点に要約することができる。その第一は，エドワード1世が太古の昔の，無関係な出来事に過大な関心を寄せ

て事実を歪曲し，信頼できる記録や文書の存在する，より最近の出来事を無視していると批判した上で，これらの記録・文書に基づいてイングランドとの関係を仔細に検証し，スコットランドが自由で独立の王国であることを証明しようとした。第二に，「ブルートゥス伝説」に関しても，そもそもエドワード1世はノルマン人の子孫であってブリトン人ではないこと，さらに，スコットとスコットランドはブリトン人とは異なる独自の起源を持つとして，その出自神話を次のように主張した[57]。

「エジプトのファラオの娘スコゥタ（Scota）が大船団を率いてアイルランド（Hibernia）に上陸した。そこでアイルランド人（Hibernicis）の1部を船に乗り込ませ，エジプトから運んできた玉座（sedile regium）とともにスコットランド（Scocia）に渡った。この玉座をイングランドの現在の王がスコットランド王国の他の象徴（insignia）とともに暴力によって持ち去ったのである。スコゥタはピクトを征服してその王国を没収した。スコットとスコットランド（Scoti et Scocia）の名称はこのスコゥタに由来するのであり,「スコットランドのすべてはスコゥタという女性に由来する」（A muliere Scota vocitatur Scocia tota）と，詩にもうたわれているのである。

これらのスコットが現在に至るまでその名前と国土（locum）を持ちつづけていることは周知のとおりである。したがって，スコットとスコットランドはイングランド王とは何のかかわりもないのであり，エジプト人がスコットランド王国に対していかなる権利も主張できないように，イングランド人はスコットランド王国について何の権利も主張できないのである。」

このように，スコットランド側は，エドワード1世がスコットランド支配の根拠とした「ブルートゥス伝説」に対して「スコゥタ伝説」で応戦し，イングランドからの独立を主張したのであるが,ここで注目されるのは「スコゥタ伝説」の内容である。この伝説自体は古くから知られ，前節で紹介

したように,「ファラオの娘スコゥタ」はアレグザンダー3世の系図の中でも Scoti の始祖 Iber の母とされていた。しかし,これまでは,スコゥタを 'Scoti' と 'Scocia' の始祖として取り上げる場合,この Scoti と Scocia は第一義的には「アイルランド人」と「アイルランド」の意味であり,スコットランド人とスコットランドはそこから派生したものとみなされていた。ところが,この反論では,'Scoti' と 'Scocia' は明確に「スコットランド人」と「スコットランド」を意味している。しかも,アイルランドはスコゥタの単なる経由地あるいは兵站補給地にすぎず,スコゥタはもっぱらスコットランド人とスコットランドの始祖とされている。つまり,スコットランド側は,「スコゥタ伝説」によってスコットランドの歴史がブリトン人から自立していたことを示し,エドワード1世の宗主権を否定したのであるが,同時にこの伝説によってアイルランドからの自立をも主張したのである。それにより,「スコットランド(人)」が固有の出自神話をもつ独立の「ネイション」であることを示したのである。

さらに,「運命の石」ではなく「玉座」という名称ではあるが,「石」がスコゥタによりエジプトから運ばれたとされている点も注目される。これは,現存史料の中で「石」の起源に言及した最初であり,これ以後,「石」はスコットランドの出自神話の重要な構成要素となる。

3)「ファラオの石」と「予言」

教皇庁でスコットランド側が展開した反論は,スコットランドの出自神話にとって画期的な内容を含むものであったが,独立の根拠を並びたてるという文書の性格から,それ自体はきわめて簡略なものであった。ところが,その数年後に,このようなスコットランド固有の出自神話と「運命の石」の由来を織り込んでスコットランドの始まりからロバート = ブルースの王位掌握までを詩で表わした歴史書(*Liber Extravagans*)が現れている[58]。その著者は不明であるが,対イングランド関係の推移や「大訴訟」における王位継承権要求者(Competitors)の主張,1290年代の出来事などについて詳細な知識を持っていることから,王国の統治に深いかかわりの

あった人物と推定される。

352行の詩からなるこの歴史書のほぼ四分の一はスコットの出自神話である。その概要を紹介すれば，まずその始祖は，スコゥタではなく，アレグザンダー3世の系図の中でスコゥタの夫となっているゲール＝グラス(Gaizilglas)で，ここではスキタイ（Sciticus）の亡命貴族とされている。そのゲール＝グラスは，ファラオがエジプトを脱出した人びとを追跡して紅海で悲惨な死をとげると，「ファラオの石」(lapidem Pharaonis)を携えてエジプトを離れ，きびしい航海を経てスペインに渡った。そのスペインで彼の子孫が増え，おおいに栄えたという[59]。ちなみに，ゲール＝グラスはヤフェトの22代目とされている。

次に，ゲール＝グラスの子孫によるスペインからアイルランドへの侵入が語られる。それは，ファラオの死から1002年目に，ミロ(Milo)の息子シモン＝ブレク（Symon　Brek）によって遂行された。アイルランド(Hibernia）に向かうシモンに対して，スペイン人の王である父ミロは，ゲール＝グラスがエジプトから運んできた「この平らな石」(hanc petram fretum)をシモンに与え，「この石が置かれたところを，おまえの子孫が支配するであろう」と予言したという[60]。以上がアイルランド侵入の経緯であるが，ゲール＝グラスの子孫がスペインでもアイルランドでも「スコット」とはよばれていない点が注目される。

ついでシモンの子孫によるアイルランドからスコットランドへの植民の話が続く。それはまずLoriという名の男が彼らの一部を率いてアーガイルに渡ったことに始まる。そしてアーガイルに移った彼らは，それ以後，スコットランド人（Scoti）とよばれた。「なぜなら，ゴートランド（Gocia）からゴート人（Gothi）という名称が，スキタイからスキタイ人の名称が，それぞれ生まれたように，スコットランド(Scocia)からスコット(Scoti)という名称が生まれたからである」。アーガイルに住むスコットには何世代もの間，王がいなかったが，ついに勇敢なる戦士ファーガス（Fergus son of Erc）が「石」をアーガイルに運んできて，スコットを支配する最初の王となった。スコットはこの「石」を王の玉座(sedem regibus)に定めた。

しかし,「スコットの王だけの玉座であり,外国人の王のではない。スクーンが証人となっているように,その石は,あの時までそこに置かれていたのである」[61]。以上が *Liber Extravagans* の出自神話の部分で,以下は,「ファーガスはアーガイルにおける最初の王で,3年間統治した」と,ダルリアダ諸王の名前とその統治年数を順に記し,ついでケネス1世以後の時代について,スコットランドがいかに自由で独立の王国であったかを史実に基づいて語っていく。

Liber Extravagans の著書が語る出自神話についてみると,始祖であるゲール = グラスとその子孫がエジプトからスペインを経てアイルランドに到達するという構成や,始祖を「旧約聖書」の世界と結び付けている点など,その枠組み自体は,ネンニウスの『ブリトン人の歴史』や,『アイルランド侵入の書』と基本的には同じである。しかし,これらの文献においては,ゲール = グラスの子孫にスコット(Scoti)の名称が与えられているが,この歴史書では,スコットランドに移住するまで彼らには民族名がつけられていない。要するに,ゲール = グラスの子孫の「約束の地」はスコットランドなのであり,アイルランドはスペインと同様に経由地にすぎない。*Liber Extravagans* は,『アイルランド侵入の書』などにある出自神話の伝統的な枠組みを用いながら,その内容を教皇庁での反論の中で示された主張に沿って書き換えているのである。

Liber Extravagans は,スコットランドにおいて構想された本格的な出自神話としては現存する最初のものであり,以後の出自神話において,スコットはもっぱらスコットランド人を意味し,アイルランドとスコットランドとの系譜関係は抹消されることになる。たとえば,1320年にスコットランドの聖俗貴族がロバート1世の王位を承認するように求めて教皇に送った書簡(「アーブロウスの宣言」)では,「スコットランドのネイション」はスキタイからスペインを経由して直接スコットランド西部に来たとされ,アイルランドとの結びつきは完全に脱落している[62]。スコットランドとスコットランド人は,その歴史の始まりから自由で独立していたことを示そうとしたのである。

Liber Extravagans は，また，現存史料の中で「運命の石」という名称の由来に言及した最初のものでもある。スクーン修道院から奪われた「石」を前稿でも本稿でも「運命の石」とよんできたが，この名称は，ミロがシモンに教えた予言，すなわち「この石が置かれたところを，おまえの子孫が支配するであろう」という予言に由来する。この予言は，1370年代のフォーダンの『年代記』において，「運命が欺かないなら，この石が置かれている，その土地をスコットが支配するであろう」と格調高い二行連句の詩に改められ，この文言が以後のさまざまな年代記や著作に引用されて「スコットの運命」として語り継がれることになり，「運命の石」という名称が生まれた[63]。

「石」にまつわる「予言」は，同じ頃のイングランドでも知られている。ただし，それは「ミロの予言」ではなく「モーゼの予言」とされている。たとえば，エドワード1世の死（1307年）の直後に書かれた「スコットランドの石」というフランス語の歌については，その冒頭部分を前稿で紹介したが，それに続いて，エジプトでモーゼが「この石を所有する者は，誰であれ，はるか彼方の土地の征服者とならん」と人びとに説いたとされている[64]。さらに，1324年にスコットランドとの間でおこなわれた和平交渉を記した記録でも，「この石を持つ者が広大な土地を彼の支配下に置くであろう」とモーゼが予言したとされている[65]。

「ミロの予言」がイングランドではなぜ「モーゼの予言」となったのか，その経緯は不明であるが，いずれにせよ，予言が双方の王国にとってきわめて政治的な意味を持っていたことは確かである。なぜなら，「石」がウェストミンスタに安置されている当時において，「ミロの予言」は，イングランドを支配するのがスコットの運命であるとの意味になるからである。他方で，「石」を所有しているイングランドにとって，「モーゼの予言」はスコットランドを支配する根拠になるからである。

むすびにかえて

本稿の課題は，冒頭に記したように，12－13 世紀における王国統合の過程で創出された「スコットランド人」がいかなるものとして自己を認識していたかを探ることである。この課題自体あまりにもおおきく，立証困難な領域に属している。しかし，この時代には，王国が一つの共同体とみなされ王と王国住民が一体のものとしてとらえられていたから[66]，即位儀礼や出自神話に示されたスコットランド王権の系譜を探ることで，この課題をある程度まで果たすことは可能である。本稿の検証作業は，そのような視点でおこなったものである。その結果，独立戦争を境に，「スコットランド人」は，アイルランドとの一体性を断ち切り，固有の出自神話をもつ独立の「ネイション」であると自らを認識しはじめたことが明らかになった。

この過程は，アイルランドに由来するゲール系文化がスコットランド王国の中で西部や北西部の「ハイランド」に決定的に後退する過程の始まりでもあった。それを象徴するのがフォーダンの『年代記』の一節である。その中でフォーダンは，1370 年代当時の王国の住民を 2 つにわけ，海岸地帯や平野部の人びとは「英語（テュートン語）を話し」，「従順で文明化」されているが，高地地方や島嶼地帯の人びとは「スコット語（ゲール語）を話し」，「野蛮な未開人」であり，「言葉の違いから自国の人びと（natio）に対しても敵意をあらわにしている」と書いている[67]。これが現存史料の中でローランドとハイランドという区分に言及した最初の記述であり，以後ハイランドには常に「野蛮な」という形容詞がつけられることになる。バウァが『年代記』の中でアレグザンダー 3 世の系図を朗唱したハイランド＝スコットを「野蛮な」（silvester）とよんでいるのもその例である[68]。

それでも，フォーダンは，ゲール語を「スコットの言語」とよび，ハイランドの住民をスコテイッシュ＝ネイションの一部とみなし，さらに，「正しく統治されるなら，法に服するであろう」と付け加えている。ところが，1521 年に出版されたメイジャー（J. Major）の『大ブリテン史』になると，英語（スコットランド英語）が「スコットの言語」であり，ゲール語は「ア

イルランド語」とよばれて外国語扱いされている。さらに，メイジャーは，「国家の本質を理解しているのは，ローランド＝スコットであるから，王国の統治と運営は彼らに対しておこなわれるべきである」と述べ，ハイランド切り捨て策とも取れる提言をおこなっている[69]。もちろん，フォーダンの記述とメイジャーの記述との間には1世紀半の経過があり，この変化を理解するには，王権とハイランドとの関係，とくにクラン＝ドナルドとの関係の推移を検討する必要がある。それは別稿の課題としたい。

(完)

註

1) N. Aitchison, *Scotland's Stone of Destiny: Myth, History and Nationhood*, Stroud, 2000, pp. 39-40.

2) S. Foster et als (eds.), *Scottish Power Centers from the Early Middle Ages to the Twentieth Century*, Glasgow, 1998, pp. 19-20.

3) S. Mac Airt & G. Mac Niocail (eds.), *Annals of Ulster, Part I*, Dublin, 1983, p. 180.

4)『スコットランド年代記』は，最近B. T. Hudsonにより新たに校訂された。'The Scottish Chronicle', in *Scottish Historical Review* 〔*SHR*〕, vol. LXXVII (1998), pp. 129-161 (at p. 150). なお，文中の司教ケラッフは，後世の年代記作者ウィンタンやバウアの記述をもとに，セント＝アンドルーズ(12世紀以前の地名ではKilrymont)の司教と一般にはみなされている。F. J. Armours (ed.), *The Original Chronicle of Andrew of Wyntoun*, vol. 4, Edinburgh, 1906, p. 185. D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon by Walter Bower*, vol. 2, Aberdeen, 1989, p. 318.

5) キャシェル(Cashel)にあるマンスタの即位儀礼地が教会とともに'civitas regalis'とされ，また，ターラ（Tara）も'civitas regalis'と記されている。*Vitae Sanctorum Hiberniae*, vol. 2, pp. 113, 115.

6) 'The Scottish Chronicle', p. 151.

7) ケネス1世とコンスタンティン3世（在位995-97）時代のスクーンについての形容である。B. T. Hudson, *Prophecy of Berâchn: Irish and Scottish High-Kings of the Early Middle Ages*, Westport, 1996, p. 42 (stanza123),

p. 50 (stanza174).

8) 'obsequia illa quae a gente Scottorum in novella regum promotione more patrio exhibentur ita exhorruit, ut ea vix ab episcopis suscipere cogeretur'— A. O. Anderson (ed.), *Scottish Annals from English Chroniclers* 〔*SAEC*〕, Stamford, 1991 (rep.), p. 232.

9) G. W. S. Barrow (ed.), *The Charters of David I: The Written Acts of David I King of Scots, 1124-53, and of his Son Henry, Earl of Northumberland, 1139-52*, Woodbridge, 1999, p. 35; G. W. S. Barrow, 'Kingship in Medieval England and Scotland', in *Scotland and its Neighbours in the Middle Ages*, London, 1992, p. 37.

10) J. F. O'Meara, *Gerald of Wales: The History and Topography of Ireland*, Penguin Classics, 1982, pp. 109-10; ギラルドゥス・カンブレンシス作，有光秀行訳『アイルランド地誌』，西洋中世綺譚集成，青土社，1996年，228頁。

11) K. Simms, 'Inauguration Ceremonies, Titles, and the Meaning of Kingship', in *From Kings to Warlords: The Changing Political Structure of Gaelic Ireland in the Later Middle Ages*, Woodbridge, 1987, pp. 22-23.

12) 'The Bull *Laudabiliter*, Pope Adrian IV's Grant of Ireland to Henry II', in E. Curtis & R. B. McDowell (eds.), *Irish Historical Documents 1172-1922*, London, 1968 (rep.), pp. 17-18; 盛節子，「12世紀アイルランド教会改革3—アングロ・ノルマン征服との関係をめぐって—」，『エール』第18号(1998年)，86-109頁。

13) F. J. Byrne, *Irish Kings and High-Kings*, London, 1987 (paper ed.), pp. 17-21.

14) A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, Edinburgh, 1975, pp. 115-16.

15) W. F. Skene (ed.), *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, vol. 1, Edinburgh, 1871, pp. 293-95.アレグザンダー3世の即位式については，次の研究がある。W. F. Skene, 'The Coronation Stone', *Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland* 〔*PSAS*〕, 8 (1868-70), pp. 66-99; M. D. Legge, 'The Inauguration of Alexander III', *PSAS*, 80 (1945-46), pp. 73-82; A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, pp. 554-56; J. Bannerman, 'The King's Poet and the Inauguration of Alexander III', *SHR*, LXVIII (1989), pp. 120-49.

16) M. D. Legge, *op*. cit., p. 79f; A. A. M. Duncan, *op*. cit., pp. 555-56; J. Bannerman, *op. cit*., pp. 120-21; G. W. S. Barrow, 'Observations on the Coronation Stone of Scotland', *SHR*, LXXVI (1997), p. 115.

17) 図1は，W. de G. Birch, *A History of Scottish Seals*, vol. 2, Edinburgh, 1905, no. 122 (pp. 109-11).なお，G・W・S・バロウは2つの根拠をあげて，この印璽を1292年のジョン＝ベイリアルの即位式を描いたものとみなしている。その一つは，印璽の下にある紋章で，中央の王の紋章が2本の線に囲まれた「競い獅子」(lion rampant) となっているが，1249年にはまだこの形の紋章はあらわれていないという。第二は，この印璽にある王の像とジョン王（＝ベイリアル）の国璽（great seal）の像とが類似していることである。G. W. S. Barrow, *op. cit*., pp. 116-17.しかし，1250年6月までに作成されたアレグザンダー3世の小型の国璽（未成年期用）にも，その裏面に2本の線に囲まれた「競い獅子」が刻印されており，この形の紋章は既に様式として確立していたといえる。また，1260年に作成された正式の国璽でも，アレグザンダー3世は右手に歯形飾りのついた王笏をもち左手を胸元のマントにあて，スクーン修道院の印璽の像と同じ姿勢で描かれている。以上の事実から，これはアレグザンダー3世の即位式を描いたものということができる。G. G Simpson, 'Kingship in Miniature: A Seal of Minority of Alexander III 1249-1257', in A. Grant & K. J. Stringer (eds.), *Medieval Scotland: Crown, Lordship and Community*, Edinburgh, 1993, p. 132.

18) D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon by Walter Bower*, Vol. 5, Edinburgh, 1990, Book X, ch. 1-2 (pp. 292-96).

19) A. A. M. Duncan, *op*. cit., p. 555.

20) 'Nec uspiam aliquis regum in Scocia regnare solebat, nisi super eundem lapidem regium in accipiendum nomen prius sederet in Scona'—*Johannis de Fordun*, vol. 1, p. 294.

21) 'Benach de Re Albanne Alexander, mac Alexander, mac Uleyham, mac Henri, mac David'—*ibid*., p. 294-95.　*Gesta Annalia* のこの系図については，D. Broun による改訂版も参照。D. Broun, *The Irish Identity of the Kingdom of the Scots in the 12th and 13th Centuries*, Woodbridge, 1999, pp. 183-87.

22) 拙稿，「スコットランドと'運命の石'—中世における王国の統合と神話の役割—」，『人文論集』(北海学園大学)，第19号（2001年)，84頁参照。

23) 拙稿，「スコットランドのノルマン＝コンクェスト」，『人文論集』(北海学

園大学)，第17号 (2000年)，22-26頁参照。

24) J. Bannerman, 'The King's Poet', pp. 131-32.

25) 'The Scottish Chronicle', p. 148.

26) F. J. Byrne, *Irish Kings*, pp. 21-22; K. Simms, *From Kings to Warlords*, pp. 22-23.

27) 前掲拙稿，「スコットランドと'運命の石'」，71頁。

28) *Scotichronicon by Walter Bower*, vol. 5, Book X, ch. 1-2 (pp. 290-93).

29) E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations 1174-1328: Some Selected Documents*, Edinburgh, 1965, no. 5 (教皇ホノリウスの勅書，1218年)，no. 6 (教皇グレゴリウス9世の勅書，1235年)，no. 9 (インノケンティウス4世の勅書，1251年)。

30) なお，1296年にエドワード1世がエディンバラ城から持ち出したregaliaの中に，王冠が含まれているから，正式に戴冠していなくとも王権の象徴として王冠そのものは存在していたと推定される。E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations*, no. 25a (p. 75).前掲拙稿，「スコットランドと'運命の石'」，83頁参照。

31) 'Chronicle of Melrose', in *Medieval Chronicles of Scotland*, trns., by J. Stephenson, Dyfed, 1988 (Facsimile rep.), p. 87.

32) J. Bannerman, 'The Lordship of the Isles', in *Scottish Society in the Fifteenth Century*, ed. by J. M. Brown, London, 1977, p. 210.

33) ハーピストについて，*Gesta Annalia* には説明がないが，これは頌歌朗詠の伴奏者であり，即位式そのものに直接関係する人物ではないためと推測される。ハーピストの左肩に盾のように見えるのは，ゲール系社会で用いられた小型のハープ(clàrsach)で，着席して演奏されるのが慣例である。「印璽」の中でハーピスト小さく描かれているのはこのためであろう。

34) J. Bannerman, 'The King's Poet', p. 133.

35) D. Ó. Crráin, *Ireland before the Normans*, Dublin, 1972, p. 36.

36) 15世紀のコナハト王の'ollamh'が書いた即位頌歌の中に収められている。K. Simms, 'Gahb umad a Fhéidhlimidh -A Fifteenth-Century Inauguration Ode', *Ériu*, xxxi (1980), p. 143; K. Simms, *From Kings to Warlords*, p. 23; F. J. Byrne, *Irish Kings*, pp. 15-16.

37) F. J. Byrne, *Irish Kings*, p. 21.なお，コナハト王の 'ollamh' は少なくとも15世紀中葉までÓ Maol Chonaire家に世襲されていた。

38) Gille-Pádruig mac Impethin と Gille-Coluim の2名で，MacChimbaetha

家がその地位を世襲したと推測する。J. Bannerman, 'The King's Poet', pp. 139-142. 一方，ゲール系の貴族らのために，ゲール語で頌歌や讃歌を作成した詩人の存在はよく知られている。最近の研究として，Mícheál B Ó. Mainnín が中世について，マン島の「王」やレノックス伯，クラン = ドナルドの首長（Lord of the Isles）に仕えたゲール系詩人の例を詳説している。'The Same in Origin and in Blood: Bardic Windows on the Relationship between Irish and Scottish Gaels, c. 1200-1650', *Cambrian Medieval Celtic Studies*, 38 (Winter 1999), pp. 1-51 (at pp. 1-17).

39) おもなものとして，ゲール語ではデイヴィッド1世の系図が12世紀の『レンスタの書』に収められている。ラテン語では，ウィリアム1世の系図が13世紀はじめにまとめられた「ポップルトン = マニュスクリプト」の中に，またデイヴィッド1世の系図がフォーダンの年代記の *Book V*, C. 50 に，それぞれ収録されている。なお，ウィリアム1世の系図では Gaithel (Goidel) Glas をさらに遡り，「生ける神の息子アダム」（Adam, filii dei uiui）にたどりついている。また，この系図の中に20名を越すアイルランド王の名前がある。フォーダンの年代記にあるデイヴィッド1世の系図でも，「ノアの息子ヤフェト」にまで遡っている。M. O Anderson, *King and Kingship in Early Scotland*, Edinburgh, 1973, pp 256-58; *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, vol. 1, Book V, ch. 52 (pp. 251-52).これらの系図相互の関係については，D. Broun, *The Irish Identity*, pp. 174-76, 180-83 参照。

40) R. A. S. MacAlicster (ed.), *Lebor Gabála Érenn: The Book of the Taking of Ireland*, Part I, London (Irish Text Society), 1993 (rep. with New Introduction), p. 165; *Lebor Gabála Érenn*, Part II, London, 1939, p. 13.『アイルランド侵入の書』に描かれたゲールの先祖とその彷徨の原型がネンニウスの作とされる『ブリトン人の歴史』（c. 830）に求められることは周知のとおりである。Nennius, 'Historia Brittonum', in J. A. Giles (ed.), *Six Old English Chronicles*, London, 1848, p. 390.

41) D. Broun, 'Anglo-French Acculturation and the Irish Element in Scottish Identity', B. Smith (ed.), *Britain and Ireland, 900-1300: Insular Responses to Medieval European Change*, Cambridge, 1999, p. 135.

42) W. Stokes, 'The Annals of Tigernach: The Fourth Fragment', *Revue Celtique*, 17 (1896), p 397.

43) W. M Hennessy & B. MacCarthy (eds), *Annals of Ulster: A Chronicle of Irish Affairs from AD 431 to AD 1540*, vol. 2, Dublin, 1888, pp. 148-49.

44) たとえば，10 世紀末の『聖カトロ伝』や，『アルスタ年代記』の 1169 年の項などに記された，スコットランドからアーマ (Armagh) に来た学生・学識者の話を参照。'Life of St. Catroe', in A. O. Anderson (ed.), *Early Sources of Scottish History A. D. 500-1286*, vol. 1, Stamford, 1990 (rep.), p. 437; A. Boyle, 'St. Catroe in Scotland', *Innes Review*, 31 (1980), pp. 3-6; *Annals of Ulster*, vol. 2, pp. 160-63.また，先に紹介したジェラルドも，音楽についてスコットランドがアイルランドを技芸の源泉とみなして模倣していたことに言及し，理由はその祖先がアイルランドから来たことにあるとしている。ただし，ジェラルドの時代には，つまり 12 世紀末には，スコットランドの方が師であるアイルランドをはるかに凌駕するまでになっているとも書いている。J. F. O'Meara, *Gerald of Wales*, p. 104;『アイルランド地誌』，208 頁。

45) 前掲拙稿，「スコットランドと '運命の石'」，70 頁参照。

46) ゲール語の衰退過程を年代的に特定することは困難であるが，D.ブラウンは，註 42) で紹介した 12-13 世紀のラテン語系図に出てくるゲール系人名の綴り法を検討して，少なくとも 13 世紀初頭まではスコットランドの特に東部にある教会・修道院にゲール語を読み書きできる学識者が存在しつづけ，彼らによりゲール語史料のラテン語への翻訳が進められたと推論している。D. Broun, 'Gaelic Literacy in Eastern Scotland between 1124 and 1249', in H. Pryce (ed.), *Literacy in Medieval Celtic Society*, Cambridge, 1998, pp. 183-201.

47) 'Walter of Coventry', in *SAEC*, p. 330.

48) ファイフ伯家では Duncan 2 世 (Dunnchad, 1154-1204) 以後，またストラスアーン伯家でも Gilbert (Gille Brigte, 1171-1223) 以後，アングロ = ノルマン系貴族との結婚をすすめている。ただし，両伯とも，Dunnchad や Gille Brigte などゲール系の名前を代々世襲している。R. A. McDonald, 'Matrimonial Politics and Core-Periphery Interactions in Twelfth- and Early Thirteenth Century Scotland', *Journal of Medieval History*, 21 (1995), pp. 227-47 (at pp. 233-37); D. Broun, 'Anglo-French Acculturation', p. 138.

49) '…populus noster et uester ab olim liberi ab uno processomus germine nacionis quos tam lingua communis quam ritus…' —A. A. M. Duncan (ed.), *Regesta Regum Scottorum,* vol. 5, Acts of Robert I, 1306-1329, Edinburgh, 1988, no. 564 (p. 695).
この書簡についての研究史は，拙稿，「スコットランド独立戦争とアイルランド—ブルースの侵略とプロパガンダ文書—」，『エール』第 19 号 (1999 年)，

24-26頁で詳しく触れた。また，スコットランドとアイルランドの歴史的関係を特集した *History Ireland* をも参照。S. Duffy, 'Medieval Scotland & Ireland: Overcoming the Amnesia', *History Ireland*, 17, no. 3 (Autumn 1999), pp. 17-21; K. Nicholls, 'Celtic Contrasts: Ireland & Scotland', *ibid*., pp. 22-26.

50) E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations*, no. 28 (pp. 81-87).この勅書の中で教皇が論じた歴史的経緯の多くはスコットランド側の史料に基づいており，スコットランド側のロビー活動の成果とされている。R. J. Goldstein, 'The Scottish Mission to Boniface VIII in 1301: A Reconsideration of the Context of Instructiones and Processus', *SHR*, LXX (1991), pp. 1-15 (at p. 8).ただし，スコットランドの教会ではなく「王国」がローマ教会に直属するとの主張は，これまでに例がなく，ボニファティウス8世も勅書の中で具体的な根拠を示していない。スコットランド教会（ecclesia Scotticana）が教皇の「特別な娘」としてその直轄下に置かれたことは前稿で示したとおりである。前掲拙稿，「スコットランドと'運命の石'」，71頁参照。

51) E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations*, no. 30 (pp. 96-109).

52) E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations*, no. 29 (pp. 88-95); E. F. L. Stones & G. G. Simpson (eds.), *Edward I and the Throne of Scotland 1290-1296: An Edition of the Record Sources for Great Cause*, Oxford, 1978, vol. 1, pp. 154-56.

53) エドワード1世のこの解釈については，R. J. Goldstein, *The Matter of Scotland: Historical Narrative in Medieval Scotland*, Lincoln, 1993, p. 64参照。

54) この当時，ジョン＝ベイリアルはイングランドでの捕囚を解かれてフランスにあり，イングランド軍占領下のスコットランドでは，Sir John de Soulesが唯一のガーディアンとして軍事・外交の指揮を取っていた。教皇庁へ使節を派遣したのもSir Johnである。G. W. S. Barrow, *Robert Bruce and the Community of the Realm of Scotland*, Edinburgh, 1988 (3rd ed.), pp. 114-18.

55) 2編の文書は，バウァの『年代記』に収められている。D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon by Walter Bower*, vol. 6, Aberdeen, 1991, Book XI, ch. 46-56 (Instructiones), ch. 57-64 (Processus). 'Instructiones'は，その題名からスコットランド本国で作成されて教皇庁の使節へ送られたと従来は解釈されていたが，現在では文面その他から'Processus'（抗弁）と同様に教皇庁で書

かれたものとされている。また，'Processus Baldredi' と，3人の使節のひとり Master Baldred Bisset の名前がつけられていることから，'Processus' はビセットの作とされ，その内容から 'Instructiones' を推敲した，より正式な文書とみなされている。ただし，これが教皇庁に提出された文書そのものの写しかどうかは不明である。D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon*, vol. 6, pp. xviii- xxi, 260-63; D. Broun, 'The Birth of Scottish History', *SHR*, LXXVI (1997), pp. 4-22 (at pp. 15-16).

56) E. F. L. Stones (ed.), *Anglo-Scottish Relations*, no. 31 (pp. 110-117).

57)「スコゥタ伝説」については，'Instructiones' (ch. 49, p. 142) よりも 'Processus' (ch. 62, p. 182) が詳細である。以下は 'Processus' による。

58) D. Broun & A. B. Scott (eds.), '*Liber Extravagans*', in D. E. R. Watt (ed.), *Scotichronicon by Walter Bower*', vol. 9 (Critical Studies and General Indexes), Edinburgh, 1998, pp. 53-84.この書は，*Liber Extravagans*(『補遺』)という題でバウァの『年代記』の写本の一つに付け加えられていたが，これ自体は1304年から1306年3月の間に書かれ，バウァの『年代記』とは別個の著作である。詩形式で書かれていることから，*Chronicon Rythmicum* という書名でよばれたこともある。著者自身の説明によれば，アレグザンダー2世時代以前については「複数の古い年代記によって学んだこと」を，アレグザンダー2世時代以後については「私自身が見聞して学んだこと」を，それぞれ記述したという。*Ibid*., ll. 5-6 (p. 66), ll. 185-86 (p. 74).

59) *Ibid*., ll. 15-36 (pp. 66-68). ネンニウスの『ブリトン人の歴史』においても，スコットの始祖はスキタイの亡命貴族（ただし，個人名はない）で，その彷徨は同じように「出エジプト」と結び付けられている。また，次に紹介するアイルランド植民の年代を「出エジプト」から1002年目とするのも，『ブリトン人の歴史』と同じである。したがって，*Liber Extravagans* のこの部分はネンニウスを典拠にしたと推測される。Nennius, 'Historia Brittonum', p. 390.

60) 'Milo prophetavit…quod sua regnaret stirps hanc quocunque locaret' —'*Liber Extravagans*', ll. 45-11. 47 (p. 68).

61) 'sedem regibus, inde suis tantum, sed non aliens. Ut Scona testatur usque tunc lapis iste locatur'—*ibid*., ll. 95-97 (p. 70).

62) J. Fergusson, *Declaration of Arbroath*, Edinburgh, 1970, p. 9.

63) 'Ni fallat fatum Scoti quocumque locatum Inueniant lapidem regnare tenentur ibidem' — *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, Book

I, ch. 27 (p. 24).

64) 'En Egipte Moise a le people precha, Scota la file Faraon bien l'escota, Qare il dite en espirite, "Qe ceste piere avera, De molt estraunge terre conquerour serra"'—M. D. Legge, La Piere D'Escoce', *SHR*, XXXVIII (1959), p. 110.

65) 'Prophetauerat enim Moises quod qui petram illam secum afferret amplas terras suo dominio subiugaret'—N. Denholm-Young (ed.), *Vita Edwardi Secundi*, London, 1957, p. 132.

66) S.Reynolds, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900-1300*, Oxford,1997, pp. 260-61; 江川溫,「民族意識の発展」, 朝治哲三他編著,『西欧中世史〔下〕』, ミネルヴァ書房, 1995, 119-121頁参照。

67) *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, vol. 1, Book II, ch. 9 (p. 42).

68) *Scotichronicon*, vol. 5, Book X, ch. 2 (p. 294).

69) A. Constable (ed.), *John Major's Greater Britain*, Edinburgh, 1892, pp. 48-50.